

# かじ ひ けし 火事と火消

江戸時代は、とても火事が多い時代だった。約270年間で、780件以上の火事が発生し、記録に残る大火事は、200件以上起こったという。

## <火事はこわして消せ!>

江戸時代は、あまり水を使わず、建物をこわすことで消火した。「よい越しの銭はもたない」江戸っ子の性格は、家や財産をもっている、火事で焼けてしまうことから生まれたといわれる。

あまりの火事の激しさに、火消(消防士)たちがはしごを降りて逃げだそうとしている。

水でぬらしたむしろ(ござ)で、必死に火を防いで、消火活動をしようとしている。

### 水を使う消火道具

火事に備えて、町ごとに水を入れた「用心桶(用水桶)」を置いていた。また、「龍吐水」(左下)、「水鉄砲」(右下)という消火ポンプがあったが、遠くまで水が飛ばないため、消火能力は低かった。



## かじ えど はな 「火事とけんかは江戸の華」

### まち び けし たん じょう 町火消の誕生

江戸時代のはじめには、大名火消しかいなかった。大名火消は城や武家屋敷以外の火には熱心でなかったため、幕府は町人たちの火消をつくった。町を守る町火消は、人々のあこがれだったが、気性があらく、けんかが多かった。

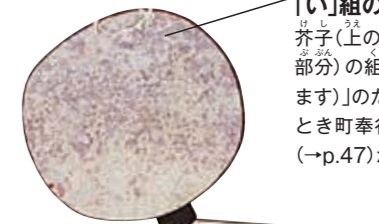


わたしたちの町を守るよ!

水をかぶって出かけたら、火の粉が降ってきて逃げないよ。江戸っ子だからね。

### 「い」組の纏

芥子(上の丸い部分)と栞(下の四角い部分)の組み合わせで「けします(消します)」のだじやれになっている。このとき町奉行だった、大岡越前守忠相(→p.47)がつけたといわれる。



### 火消に指示を与える纏持ち

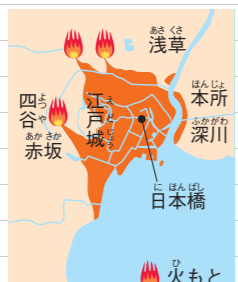
纏持ちは、火事の現場で、「ここから後ろには火事を広げさせないぞ」という場所に纏を立て、みんなに消火のための指示を出した。



「へ、ら、ひ」は音の感じが悪いので、「百、千、万」にしたんだって。

## えど はる ふゆ 江戸では春と冬に火事が起こる

火事は、春の強い南風と、冬の乾燥した北西の風(からっ風)の季節に多い。強風によって、火はまたたく間に燃え広がった。

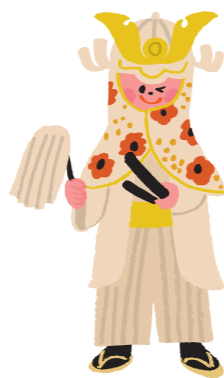


### 江戸の三大火事の火もとと焼けた範囲



## ひ けし 火消には3つのグループがあった

江戸の火消は、武士たちを集めてつくられた「大名火消」「定火消」と、町人によってつくられた「町火消」のグループがあった。



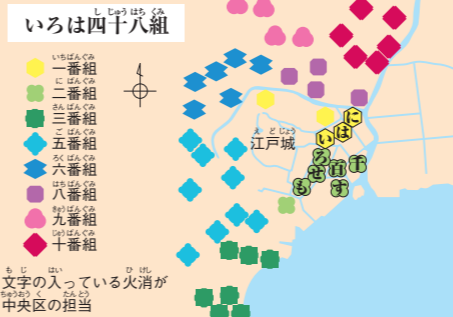
**定火消**  
幕府の役人でつくられる火消。かぶとをかぶり、はかまと羽織を身につけ、馬に乗って与力・同心(→p.44)を引き連れて指揮をした。



**町火消**  
火事(とくに、とび人足)を集めてつくられた。頭きんをかぶり、半てんを着て、ももひきはいていた。町人が住む町で活動した。

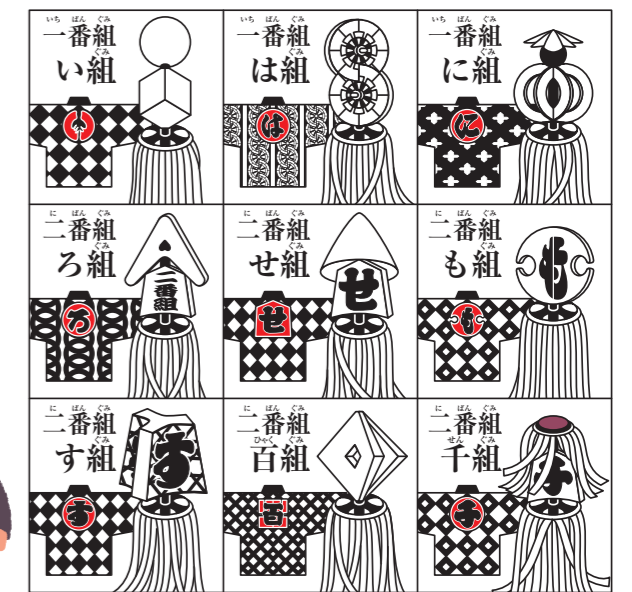
## まち び けし いろは しじゅうはちくみ 江戸町火消「いろは四十八組」の配置

江戸城周辺や武家屋敷は、おもに大名火消や定火消が担当した。



## かじ げん いん 火事の原因のナンバーワンは、放火だった!?

火事が家が焼けると、家を建てかえるので、建設工事の仕事が増える。人口が多く、仕事がない人も少なくなかった江戸では、そのため放火があとを絶たなかった。火事のあと江戸の町は、建設工事で景気がよくなったともいわれる。



### 中央区を守った江戸の纏と半てん

町火消は、のちに火消組合ができて、江戸を四十七組に分け(そのあと、四十八組に)、「いろは」の47文字を組の名前とした。そのときに、組の目印として、それぞれ纏と半てんを決めた。中央区を担当していたのは、上の図の全9組。